

川上淳著『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』

札幌大学総合研究 第4号（2013年3月）

〈書評〉

川上淳著『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』

濱口 裕介

本書は、多年にわたって「奥蝦夷地」の歴史を追究してきた、川上淳氏による初の論文集である。本書の定義によれば、「奥蝦夷地」とはおもに「蝦夷地東部と千島」を指している。そもそも従来の近世蝦夷地に関する歴史研究は、ともすれば一地域の事例を蝦夷地全体につうじる動向として論じる傾向があった。それに対し、長年北海道根室市に在住し、同市の博物館開設準備室に勤務された著者は、一貫して「奥蝦夷地」の歴史にこだわり、丹念な実証にもとづく堅実な研究成果を発表してきたのである。実をいえば評者も、著者が発表された労作「ラクスマン来航に関する文献・史料・遺物」（『根室市博物館開設準備室紀要』第6号 1992年 本書には未収録）に接したことが、日露関係史に関心を持ったきっかけの一つであった。著者の研究に導かれてきた者の一人として、まずはその成果が一書に結実したことを喜ぶたい。

さて、本書序章において、著者は「奥蝦夷地」に目を向ける重要性を指摘している。それは、この地にはアイヌと日露両国人の邂逅の場となり、それゆえ幕府の対外政策の焦点となった歴史があり、「単なる辺境の一地域史などではなく、幕府の蝦夷地政策や対外政策の上で非常に重要な歴史」というものである。

特にその考察対象として、著者は「寛政年間前後」に着目する。それは、アイヌ蜂起の最後の事件とされるクナシリ・メナシの戦いや、第一回ロシア使節ラクスマンの根室来航に始まる日露交渉などの大事件がこの時代の「奥蝦夷地」で起こったためである。こうした動向の帰結として、幕府は蝦夷地の直轄政策を推進していった。まさに「蝦夷地にとっても幕藩制国家にとっても激動の時代」が、ほかならぬ「奥蝦夷地」から幕を開けたのである。しかしながら、当該時期の「奥蝦夷地」の状況については不明な点が多く、事実関係の確認から着手せねばならない。著者が本書のめざすところを「近世の奥蝦夷地の具体的な実態を探り、そのことが日本近世の中でどのような意味を持ったか、あるいは、現地に住んでいたアイヌの人々がどのような社会発展を遂げ、また幕藩制国家やロシアと交

易・使役などを通じて関係を持つようになるが、それが彼らにとってどのような意味があったのかを、追究すること」に定めるのも、こうした認識にもとづいている。

内容に目を向けよう。本書の構成は次のとおりである。

序章

第Ⅰ部 近世後期蝦夷地東部のアイヌ社会

第一章 寛政年間前後の奥蝦夷地 / 第二章 奥蝦夷地のアイヌ首長イコトイ・ツキノエ・ションコ / 第三章 クナシリ・メナシの戦いの死者・指導者 / 第四章 チャシの消滅期について / 第五章 文献からみたチャシ再考 / 第六章 最上徳内のアイヌ観 / 第七章 近藤重蔵のアイヌ政策 / 第八章 厚岸国泰寺とアイヌ / 第九章 『加賀家文書』からみたネモロ場所の交易品・賃金・給与品

第Ⅱ部 蝦夷地の日露関係と千島

第一章 千島史の歩み / 第二章 ラクスマン来航についての重要史料 / 第三章 ラクスマン来航と絵図（『ヨロシイヤ国道具ノ図』） / 第四章 リコルドの交渉と高田屋嘉兵衛 / 第五章 十八世紀後半～十九世紀初頭の千島と日露関係 / 第六章 文化年間のラショワ島アイヌの交易と鉄鍋・ラッコ皮 / 第七章 宝暦六（一七五六）年紀州船エトロフ島漂流記について / 第八章 近世千島への漂流民 / 第九章 漂流民が見た千島と千島のアイヌ

終章

全体は、おもにクナシリ・メナシの戦いやその後のアイヌ政策を扱った第Ⅰ部と、ラクスマン来航に代表される日露交渉史や「千島史」を扱った第Ⅱ部とからなる。紙幅の都合上、各章の内容の紹介は省くが、そもそも研究蓄積が薄いテーマであるため、どの論文もたいへん貴重な成果といえる。戦後ほとんど研究対象になることすらなかった千島列島の歴史に挑んだ第Ⅱ部は、なかでも今後共有されるべき財産といえよう。

また、特筆すべきは、本書が諸史料・諸文献の豊富な情報をみごとに整理している点にある。先行する研究成果を丁寧に紹介し、その上でみずからの研究を展開するという姿勢も、本書に一貫して見られるところである。こうした研究姿勢が、本書の分析に大きな説得力を持たせている。

このように丁寧な情報の整理に紙幅を費やしているため、本書は約500ページとかなりのボリュームがある。それゆえ本書は、研究書としてのみならず、信頼に足る研究成果が反映された基礎データ集としても、価値ある書となるであろう。

評者が気づいた若干の疑問点についても指摘しておきたい。本書についてはすでにいくつかの書評・紹介が存在するが（たとえば、『北海道史研究協議会会報』第89号〈2011年〉における田端宏氏の紹介、『日本歴史』第771号〈2012年〉における菊池勇夫氏の紹介、『北海道・東北史研究』第8号〈2012年〉における松本あづさ氏の書評）、これらはおもに北方史研究の視点から、本書第Ⅰ部の内容を中心として論じている。よって、本稿では日露関係史について論じた第Ⅱ部の内容に注目したい。

著者は第Ⅱ部第二章「ラクスマン来航についての重要史料」、第三章「ラクスマン来航と絵図（『フロシヤ国道具ノ図』）」でラクスマン来航時の根室における日露間の多様な文化交流の事例を紹介し、また第四章「リコルドの交渉と高田屋嘉兵衛」においては、ゴロヴニン事件時における文書の往來を整理し、さらにラクスマン・レザーノフ両使節渡来時の交渉と比較している。これらの論文においても、著者ならではの丁寧な整理がなされており、情報としては非常に貴重なものがある。しかしながら、せっかくの丁寧な分析にもかかわらず、結論は通説的な叙述にとどまっており、著者の掲げる「奥蝦夷地史」ならではの視点が十分に打ち出されていないように思われるのである。

たとえば、ゴロヴニン事件の解決に尽力した高田屋嘉兵衛についての評価に目を向けてみよう。「高田屋嘉兵衛の立場や見識、判断力だけでなく、何よりもリコルドとのコミュニケーションが解決への大きな力となり、以後…（中略）…四〇年間ほどの日露関係は、何事もなく過ぎたのであった」「日露関係を良好な関係に導いたのは、民間人である高田屋嘉兵衛の役割が大きかった」とあり、通説と同様に日露間の緊張緩和に寄与した点を著者は高く評価している。

しかしながら、この嘉兵衛こそは幕領期のエトロフ島経営を担った商人であり、第Ⅰ部・第Ⅱ部をつうじて著者が重視する「くにざかい」形成による千島列島の分断をもたらした人物のひとりではなかったか。現に、嘉兵衛自身、中部千島のラショワ人について「ラショワ人エトロフ島へ来候節、彼夷人共ヲ捕へ縄掛」たと述べている（『文化九年高田屋嘉兵衛魯西亞船ニ被捕 同十年帰国御公儀松前奉行江上申始末書写』 函館市中央図書館蔵）。交易のためエトロフ島に渡来したラショワ人たちを「くにざかい」管理のため捕縛したというのである。このような「奥蝦夷地」の請負商人としての嘉兵衛の知られざる側面を提示し、一石を投じてほしかったところである。

また、ラクスマン来航時の文化交流について、著者は「ロシア文化の流入口としての根室の持つ重要性」を指摘している。たしかに、著者のいうごとく、ラクスマン使節団と松前藩士・幕吏との交流は、質・量ともに決して軽視できないものがあると考えられる。

しかし、読者としてはそうした交流を可能にした要因についても著者の考えを聞きたい

ところである。というのも、幕府はこの時期、海防のための方策として、上陸した異国人を小屋に閉じ込め、虎落（もがり 竹矢来のこと）で囲んで民衆から隔離するという方針を打ち出していた（上白石実『幕末の海防戦略』 吉川弘文館 2011年）。そして、ラクスマンに次いで長崎に来航したロシア使節レザーノフに対しては実際にこうした方策がとられ、彼我の交流は通詞たちを介するもののみに限られてしまったのである。この対応の差は、奈辺に求められるのであろうか。これは、著者が提示する「近世日本において、蝦夷地をどう位置づけるのか」という論点と大きくかかわる問題ではないだろうか。あるいは、17世紀における松前藩のイエズス会士ジロラモ＝デ＝アンジェリスへの対応（禁教下にもかかわらず、同藩は「ここは日本ではない」として宣教師の松前滞在を許可した）とも考え合わせたいところである。

もちろん、抑制的な筆致と堅実な実証性が著者の持ち味であり、そこにこそ著者の研究の魅力がある。しかし、著者が「奥蝦夷地史」という独自の視点を掲げる以上、日露関係史についても一歩踏み込んで、従来と異なる新たな歴史像を提示してほしかったところである。

評者の不勉強ゆえ、「ないものねだり」的な評となってしまった。大著に対して、かくのごとき思い付きのような評を寄せるのはいかにも心苦しい次第である。いうまでもなく、これらの点はいささかも本書の瑕疵となるようなものではない。

当該分野に関心のある向きは、ぜひ本書を書架に備えられんことをお勧めしたい。そして、評者のごとく、著者の豊かな研究成果に接し、当該分野に関心を持つ後進が一人でも多く現れんことを願うものである。

（北海道出版企画センター 2011年2月 512頁 6400円）